



講座 精神疾患の臨床 1 気分症群

神庭重信 編集主幹・担当編集,
松下正明 監修
中山書店
2020年6月 504頁
本体価格 15,000円+税

講座 精神疾患の臨床 2 統合失調症

神庭重信 編集主幹,
笠井清登 担当編集,
松下正明 監修
中山書店
2020年7月 344頁
本体価格 15,000円+税

精神科研修を始めたばかりの頃、中山書店の精神医学の教科書は医局の図書室の本棚の一画に、重厚かつ整然と並ぶ医局の本棚の心強い要の感があった。かつての初学者が専門医・指導医となり、以前ほど手に取る機会は減っていたが、2020年に30年ぶりの刷新刊行された今、再会することになった。

本シリーズの歴史は古く、1975～90年刊行の「現代精神医学大系全25巻（懸田克躬他編）」が第1世代で、それに次いで1997～2001年に「臨床精神医学講座（松下正明総編）」全36巻が刊行され、現在第3世代となる「講座 精神疾患の臨床」シリーズが順次刊行中で、コンセプトは最新かつ、臨床上のニーズが高い疾患を中心に編んだコンパクトなシリーズと銘打たれている。正直なところ、A4の厚紙装丁で「コンパクト」というのは無理があると思ったが、出版技術の進化か、思ったより重さは感じず、深掘りしつつ、かつ扱う範囲の自由さに、軽装で時代の先端を駆けるイメージがある。

第1巻の「気分症群」（神庭重信編）の章立ては、1章にて「概念・診断・疫学」、2章「症候・症状論と精神鑑定」、3章「病態」、4章「治療」と、無難な流れであるが、他書ではあまり扱われない新規性をもった項が多くみられる。例を挙げると、うつ病・双極症の歴史の変遷を踏まえた記載、ひきこもりの専門家からの視点から「現代抑うつ症候群」についての総説、気分症群と創造性について、医療人類学からみた気分症群、当事者の目線のうつ病診療につい

て、多くの紙幅が割かれ、治療において、精神療法については、マインドフルネスから森田療法、力動精神医学について解説され、さらに復職支援、インターネットを用いたうつ病診療、ニューロモデュレーションとしての磁気治療、電気けいれん療法、深部脳刺激（DBS）まで広げて論じている。

抑うつ症群10のルール、内因性うつ病の症例提示の「機械猫D」の事例はぜひ若手に読んでいただきたい。

第2巻「統合失調症」（笠井清登編）の構成はさらに独創的である。序文で编者による統合失調症についての「わかっていること」と「わかっていないこと」の説明に始まり、第1章に「当事者・家族に学ぶ統合失調症の理解と支援」を置くところに本書の意気込みが感じられる。著者のなかに精神障がい当事者の名も見うけられる。第2章「専門職に学ぶ統合失調症の理解と支援」において、基礎知識のUp to Date、診断の歴史の変遷について解説され、第3章「ライフステージに沿った統合失調症の理解と支援」で、学校精神保健から高齢発症のサイコーシス症候群の解説、第4章「共に創る統合失調症の理解と支援に向けた対話」で、当事者要望を取り入れた研究、精神保健サービスにおける患者市民参画（patient and public involvement：PPI）当事者研究など、そして第5章「Topics 変革に向けて」で振り返りつつ未来をめざす形で結ばれる。当事者視点をこれまでになく重視し、統合失調症をもつ人のリカバリーを支援する社会をめざしたアンチスティグマ目線を貫いているのが特徴で、一方薬物療法についての記述が簡素なことも、第2巻の特徴で、これも今後の医療へのメッセージなのだろうか。

かつての本棚の師は、新しい装いとなり、伝統によって鈍重にならず、現代的で、自由にのびのびと知をひろげ、さらに教え上手になった感がある。昨今は、とりあえず一通りの臨床をこなすことを目的にした携帯できる大きさの教科書も増えており、実臨床では実装性も重要で、書評子も若手に推している。そういう点では、中山書店の教科書は価格的にも重量的にも携帯にはまったく向かない路線を歩んでいるが、精神医療の深層については、ポケットに入る容量では到底語りつくせない。深みある知の獲得をめざす方に、本書を薦めたい。

（今村弥生）